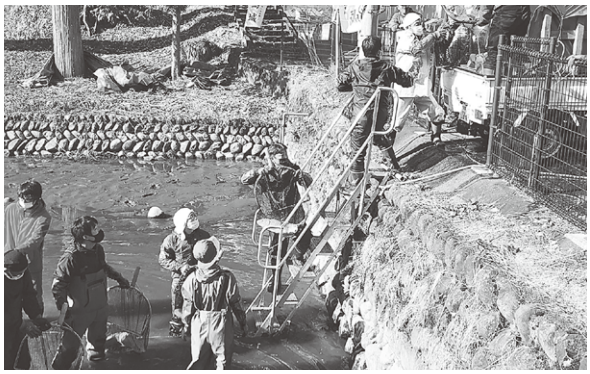
特レポ
＼ 市民ライターがまちの話題をお届け!! ／
広報ひだまち特派員レポート
（特派員 ： 水樹　華 ・ 岡田　直樹）

4/2 瀬戸川に名物の鯉が引っ越し、春の訪れ告げる

「いい国」願って1192匹の鯉を放流

特レポ



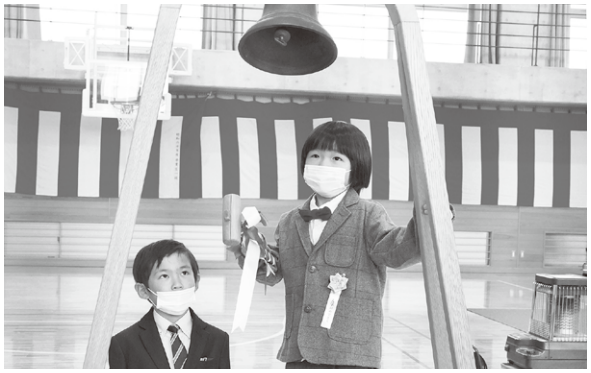
古川に春を告げる「瀬戸川の鯉の引っ越し」が行われました。瀬戸川は冬の間、近隣住民が流雪溝として利用するため、鯉は増島城址の堀（天神池）に引っ越しますが、毎年４月には市内外のボランティアや飛騨市観光協会の職員らの手で川に移されます。

この日は、ボランティアなど約３０人が天神池に入って横一列になり、長い網を使って鯉を池の隅に追い込んだ後、玉網で鯉をすくいあげ、軽トラックで瀬戸川へ運びました。

３人の孫を連れて訪れた地元の井西かず子さんは「鯉の放流はテレビでしか見たことがありませんが、現場を初めて訪れ、大きな鯉の迫力に圧倒されました」と、また孫の新名みなきさんは「たくさんの錦鯉が群れになって泳ぐ姿が美しく、とても感動しました」と話していました。

4/7 宮川小学校へ2人の新入生が入学

「ひびきの鐘」を鳴らして小学校生活スタート



宮川小学校で今年度の入学式が行われ、入学した１年生児童２人が、同校に受け継がれている「ひびきの鐘」を鳴らし、希望にあふれる学校生活をスタートさせました。

この鐘は、１．８メートルほどの高さのアーチ状の釣鐘台に、校長室に代々保管されてあった鐘を吊るしたものです。合併して飛騨市が誕生したときに「ひびきの鐘」と名付けられ、新たに釣鐘台も作られて同校のシンボルとして復活。以来、毎年入学式と卒業式の２回だけ鳴らす伝統となっているそうです。

式典後には、新入生の稲野莉緒翔さんと佐藤大翔さんがこの鐘を鳴らして退場しました。稲野さんは「鐘は音が大きくて耳を押さえた。学校では、国語とか算数とか鉄琴とかを頑張りたい」、佐藤さんは「陸上クラブや算数を頑張りたい。鐘を鳴らすときは緊張した」などと話していました。

4/8 飛騨古川飾り物会の解散費の積立金を市へ寄附「文化伝承に使って」

飛騨地域に伝わる「飾り物」の文化を継承してきた飛騨古川飾り物会の駒侑記扶代表と庶務会計を務める平瀬徹夫さんが市役所を訪れ、沖畑教育長に対し、「今後、市の文化伝承のために使ってほしい」と寄附金を手渡されました。

飾り物とは、国や地域での慶事などに行われるもので、その慶事にちなんだテーマや、年ごとの歌会始の御題、干支などの課題が与えられ、その課題を日常で使う茶道具や酒器、大工道具などの小道具を用いて表現する遊びです。全国各地で行われていましたが、現在では古川町や高山市などごく限られた地域でしか見られなくなっているとのことです。

駒さんは「残念ながら高齢化とメンバーの減少で、力仕事もある展示などの活動が難しくなりました。飾り物を好きな若い子が出てきてくれれば継承できると思うので、それを期待したい」と話していました。

4/16 栽 美味しいお米養成講座を開催
培の基礎やコツを学んで、もっと美味しいお米づくりを

今年度、第１回目となる「美味しいお米養成講座」が古川町公民館で行われました。これは、市民の皆さんから「より美味しいお米を育てるにはどうすればいいの」というご意見が寄せられたことを受けて企画されたもので、昨年に引き続いて行われました。全３回の予定です。

今回は「田植え期に行う美味しいお米の育て方」や「トラクター操作のコツ」などに関する講座が行われ、市内の農業者４５人が参加されました。

参加した米農家の岩佐英夫さんは「講座は、ポイントがよくまとめられていて分かりやすかった。広葉樹の森からくるミネラル豊富な水も、飛騨市のお米が美味しい理由だと思う。生産規模では他所にかなわないので、これからは品質・ブランド力の向上をめざすべき」と話していました。

4/16 小 小島城址公園整備委員会の皆さんが作業
島城跡に至る登山道の整備や倒木処理に汗

特レポ

県史跡の小島城跡を守る地元保存会「小島城址公園整備委員会」（酒井敏三会長）が、城跡までの登山道の補修や倒木処理などを行いました。

同委員会は平成１７年に太江区と杉崎区、２４区の有志によって結成され、雪で傷んだりした登山道や東屋の補修、夏の草刈りなどに努めています。

この日は会員４３人のうち約３０人が参加し、太江、杉崎、沼町から入山する３本の登山道と車道に分かれて２時間ほど汗を流しました。山頂近くの階段の補修や丸太で作ったイスの防腐剤処理、倒木や折れた枝の後始末などを実施。来訪者が歩きやすいように作業を行いました。参加した阪上敏彦さんは「この冬は大雪で幹折れや倒木が多くて大変ですが、安全のため手を抜けません」と、チェンソーを手にあちこちで作業をしていました。

4/16 美 ワークショップ「透かし折り紙をつくって楽しもう！」を開催
しい「透かし折り紙」で癒されて

飛騨市美術館で開催中の「うっとりがみの『透かし折り紙』展～光と灯で広がる癒しの世界～」の一環で、ワークショップ「透かし折り紙をつくって楽しもう！」が行われました。

「透かし折り紙」とは、薄い半透明で光を通すカラフルな紙を用いた折り紙です。星や花など、さまざまな色や形の折り紙を作って組み合わせたり、重ねて張り合わせたりして、光を通すステンドグラスのような色鮮やかな文様を作ります。

当日は、中村さんをはじめ「うっとりがみ」のメンバー８人が指導にあたり、市内や高山市などから参加した約５０人が熱心に取り組みました。

神岡町から友人と参加した女性は「透かし折り紙は今回初めて知りました。もともと折り紙は好きなんですが、また違った感覚の作品で素敵。家へ帰ってまたやってみたいです」と笑顔で話していました。

飛騨市 Facebook 公式アカウント 飛騨市役所

まちの話題に掲載しきれないイベントや写真は市の公式 Facebook で配信中。

4/22 広葉樹のまちづくりに専門家の知見など求める

森林総合研究所 関西支所と市が連携協定を締結

国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 関西支所と市が、「広葉樹資源の有効活用についての研究・技術開発に関する連携協定を締結しました。

この協定は、互いに連携協力し、市の広葉樹資源の有効活用による持続可能な地域づくりプロジェクト「広葉樹のまちづくり」の推進に必要な研究や技術開発をさらに進めることが目的。同研究所には、市をフィールドとして活用していただき、「広葉樹のまちづくり」にも助言などをいただきます。

締結式では、同支所の桃原郁夫支所長と都竹市長が、宮川町菅沼の市有林で伐採したブナとハンノキの板材で作られた協定書に、それぞれ焼きペンで署名を行いました。桃原支所長は「連携協定を結ぶことによって、森林に関する研究を行って市の行政に生かし、その成果を市民の皆さんへ還元できれば」などと話しました。

4/23 消防団員も参加して放水訓練などを実施

市内各地で山火事の合同消防訓練

特レポ

春の山火事予防運動に伴う消防訓練が市内で行われ、この日は古川町の下気多研修センター付近から出火したという想定で、古川消防署と地元消防団の合同訓練が実施されました。

消防署からは１９人が参加し、それぞれの役割を再確認しました。隊員たちは市民からの通報で現場へ駆けつけ、互いに声を掛け合いながら機敏な動作で防火水槽や用水路から送水し、枯草に覆われた斜面に向かって放水しました。

消防団「古川方面隊」からは隊員３２人がポンプ車などで駆けつけ、現地指揮本部からの情報を共有して放水訓練などを実施。情報収集にはドローンも利用しました。

中畑和也消防長は「雪が解けて野山に出掛けたり、農作業で火入れする機会も増えて火災の危険が高くなりますが、しっかり訓練を積んで有事に備え、消防団との連携もしっかりとって被害の軽減に努めてください」と話しました。

4/24 飛騨人や岐阜提灯との出会いが創作に影響か

イサム・ノグチ『光の彫刻』展が開催

アメリカ出身の彫刻家イサム・ノグチ（１９０４年ー１９８８年）の作品などを展示する「イサム・ノグチ『光の彫刻』展」が６月１２日まで、飛騨市美術館で開催されています。

この展示を受けて２４日、前・岐阜県美術館長の古川秀昭氏による「イサム・ノグチの〈あかり〉をめぐって」と題したトークイベントが同館で行われました。

古川氏は、イサム・ノグチの生い立ちを説明し、またスライドを用いながら彫刻作品など、灯り作品以外も紹介。作品が、師であるブランクーシの作品から大きな影響を受けていることが分かるなどと説明しました。

友人と訪れた古川町在住の井上春代さんは「飛騨市でこうした作品を見られるのは素晴らしいこと。今日は誘ってくれた友人に感謝します」と話していました。